

---

# バビロン

某県民

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

バビロン

### 【Nコード】

N8959Y

### 【作者名】

某県民

### 【あらすじ】

僕は茨城から大都会東京へ越してきたしがない学生だった。しかし、4月10日、僕の生活はとある一枚の紙切れ、「無法都市永住許可書」のために一変する。

「ようこそ、バビロンへ」

無法都市「バビロン」そこは名の通り、法秩序のない世界。倫理、世俗とはかけ離れた異質な空間。あるのはただ一つ。歪な「ゲーム」だけ。掛け金は己が命。配当金は「現金」「地位」「利権」なんでもござれ。欲望、謀略渦巻く異能混沌劇、始まります。

## 新生活 一日目

今日は4月9日。春がいよいよよにその暖気と、特有の霽困気を各地にもたらず今日この頃。僕、空丘詠<sup>そていひつかんあ</sup>亜は布団から体を起こした。布団の上に立ち上がって薄いタオルケットのような掛布団を僕は二つにたたむ。この季節になつてくると空気は暖かいもので、自然の布団のように僕に覆いかぶさってくれる。もとよりきつちりとした掛布団を持たない貧乏な僕にしてみればうれしい季節だ。たたみ終わつた寝具一式を部屋の過度に積むと、軽い音とともにすこし埃が舞つた。埃は春の木洩れ日を受けてわずかな光の軌跡を描く。それを目で追つて僕は窓の外を見た。そこには黄色い朝日が葉の隙間から漏れ出し、なんともはかなげな、しかし今日という日を祝福してくれているような、そんな温かさを醸し出していた。

「おはようございますっ」と

誰も返してくれる当てのない挨拶。もちろん僕もそれは知っている。けどこれはずっと小さいころからの習慣みたいなもので、特に悪いことでもないと思つて直すつもりもない。今日という一日を始めるといふ認識を僕は持つことを重要としているのだ。それは僕なりの流儀でもあつた。つぶやきはこじんまりとした和室に少しだけ響いて消えた。布団とわずかな洋服、それと勉強道具一式。それしかないにもかかわらず僕の部屋は十分に圧迫されてしまつていた。僕一人が生活するうえでは全く問題はない程度ではあるが、一般的に言えば狭い部屋だ。そこには生活感はあるでない。洋服もきつちりとたたまれただけであるし、教材に至つては開いてすらいない。僕は洋服たちの中から一組を選び出すと、ほかの服を乱さないように慎重に取り出した。

「えっと…今日はこんな服でもいいよね」

僕は寝間着を脱ぎ、外に出かけるための服に着替える。脱いだ寝間着はきつちりとたたんでおいておく。あとで水で手洗いすることにはなるのだが、すこし気になってしまふのだ。うすい上着のボタンを数個止める。シャツの隙間からすこし鎖骨のあたりが見えてしまいうすいで、僕としては何とも落ち着かないのだけど、この服をくれた人がこのように着れば良いといっていたのできつとそうなのだろう。まだ春なのにもかかわらず、すこし着崩した感じに見えるのが少し気になったが、与えてくれた人の好意をむげにはできない。着替えを終えた僕は洗面所へ向かう。そこはとても狭かったが、僕一人が使用するのなら何ら問題はないものだった。蛇口をひねる。外の雰囲気とは対を成すようにそこから流れ出す水はとても冷たかった。それに少し驚きながらも顔を洗う。顔に触れたそれは、手で感じるよりもことさらに冷たかった。

「けどすつきりしたね」

僕は少し独り言を言ってしまう癖があるのだろうか。新生活の始まりに少なからず浮ついているのかもしれない。もちろんその声にこたえる人はいない。タオルで顔を拭いて、視線を戻す。するとそこには人影が…そう思っ僕は内心かなり驚いたのだが、それは鏡に映っている自分の姿であった。

「どんだけ寝ぼけてるんだよ…僕…」

自分の臆病さと間抜けさに内心がっかりしながら僕は洗面所を離れて、リビングに向かう。そうとはいつても、その一部屋しか洗面所を除けばないのだけど。肩から下げるポーチのような鞆に必要な最低限の貴重品を入れる。一人暮らしを始めた僕が持つ貴重品なんてい

うのはたかが知れていて、携帯電話と財布くらいしかない。ゲームや音楽プレイヤーはもっていない。少しやったことがあるくらいで、別段ほしいとも思わないので手に入れていないのだ。しかし財布と携帯電話だけではやはりバッグの中身がさびしい。そうおもった僕は教材一式の中から一つを中身も見ずに選び出し、かばんの中に入れる。

「うん、こんなもんでいいよね。持つてる実感ができた」

かばんは先ほどよりも重く僕の腕に存在を伝えてくれている。このくらいの重さがないと気持ちが悪いし、なにより鞆がスカスカで格好が悪いだろう。見栄えもそうだし、歩きたびに大きく揺れてしまふのは僕としても快適ではない。

「あれ、かばんいらさないんじゃないかな…」

僕は少しだけそう考えたけれど、バッグを持たないで昼間からうるつく青年はいい風にはとられないだろうなと思ったからやはりバッグはさげてくことにした。あらかたの支度を終えたので僕はもう一度部屋を見回す。そこにあるのは無機質な空間で、ちらかっているものもなかった。忘れ物がないことを確認すると僕は玄関へ向かい、靴を履く。すると紐靴のひもを結ぶときに一度縦結びをしてしまった。どうやら今日の僕は少しおかしい。ふだんなら絶対にこんなことはしないのに。

「よし…じゃあ行ってきますね」

立ち上がって誰もいない部屋に言う。この独り言の多さはもしかしたら一人暮らしへの不安感からきているのかもじれない。返事がないことを確認して僕は満足すると扉を開ける。軽い金具のこすれる

音とともに春の空気が僕に絡みつく。部屋の中よりもさらに甘く、温かいその雰囲気を体全体に感じながら部屋の外へ。ドアを閉めて鍵をかける。なんとも質素な力ギであるがそもそもこんなところに盗みに入る輩もいないだろう。僕は大きく深呼吸をする。今日もまた一日がはじまる。けどそれは今までのものとは異なっていることは間違いないだろう。その期待に胸を膨らませて、僕はまだ未知の世界が広がる部屋の外、慣れない都会の喧騒へ向けて足を踏み出した。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8959y/>

---

バビロン

2011年11月26日22時51分発行